

＜由布市＞ 平成29年度 (3)学期 学校評価(4点セット): 3学期の検証

由布市立 阿南小学校

校長 阿部 宰士

学校教育目標 学び合い 助け合い たくましく生きる子どもの育成

重点目標	達成指標	重点的取組	取組指標	実施率 (%)	取組状況の確認 (教職員の取組はどうだったか) (どこに課題があったか)	達成状況の確認 (子どもの変容の状況) (達成指標にどれだけ近づいたか)	検証 (取組状況・達成状況から考えられる取組の効果) (改善策を練り上げるための根拠・理由)	次期に向けた改善策	
＜知＞ 学びに向かう力をもつ子どもの育成	①由布市学力調査において、低位層を30%以下にする (1, 2学期においては、国・算の単元テストにおいて、目標値に対する達成率70%以上を目指す) ②単元末の児童アンケートで、〈単元のめあて〉に対して全員が「授業がよくわかった」と回答する	学校 阿南小学習のルール4か条の徹底	見通しと課題を明確に位置付けた、子どもが主体的に取り組む授業の推進	①授業者は、見通しと課題のつながりを明確にし、子どもたちの考えの交流を位置付けた算数の授業を工夫する (定着のための時間を除く全時間で、見通しと課題を工夫して位置付ける)	76%	◇アンケート結果より 児童の意識71% (考えを持つことができた74%、考えを話すことができた71%、考えを比べたりつなげたりして考えることができた70%) 教職員の意識81% *授業研究、授業観察強化月間の取組の成果が少しずつ出てきている	* 由布市総合学力調査において、低位層を30%以下にする (各目標値からマイナス5ポイントを下回った子どもたちを低位層ととらえる) 《低位層の割合》 【国語】 → 54% 3年生 → 56% 4年生 → 80% 5年生 → 70% 6年生 → 25% 【算数】 → 54% 3年生 → 61% 4年生 → 80% 5年生 → 27% 6年生 → 50% * 児童アンケートで「、全員が「授業がよくわかる」と回答する 【単元末アンケート】(71名) 「よくわかった」 → 34 (48%) 「だいたいわかった」 → 33 (46%) 「少しわからなかった」 → 2 (3%) 「わからなかった」 → 2 (3%) → 「よくわかった」と「だいたいわかった」で 94%	【指標の妥当性】 取組指標の実施率については、網掛けをした部分が2学期よりも低下しているものである 内容を精査していくと、3学期の行事等が多いスケジュールの中で、実施回数の少なさが、教職員と子どもの意識の中にあり、それが数値の低下につながったものと考えられる 取組指標①は、次年度の校内研究及び授業改善の方向性と同一のものを設定していくべきである 取組指標②～⑤は、基本的な部分は次年度も継続していくべきだと考えられる 達成指標①は、安易に変更すべきものではないと考える 達成指標②は、今年度の途中から改善して目指しているものである 両方の達成指標ともに、次年度もこの内容を継続していくべきだと考えられる 【取組状況から】 ①は次年度の校内研究及び授業改善の方向性と同期化 ②は次年度も引き続き推進 ③は次年度も引き続き推進 ④は次年度も保護者への働きかけを継続 ⑤は次年度もさらに推進 【達成状況から】 由布市総合学力調査の結果分析から、授業改善のテーマと同一のものになる取組指標①の内容は、「児童がいくつかの考えをつなげて考えることができるよう工夫する」というようなものが望ましい それに伴って、達成指標②のアンケートの内容も検討していくべきだと考えられる	別紙 《3学期の取組の検証と次年度に向けて》 参照
			チャレンジタイムを活用した、子どもの実態に即した国語と算数の補充学習の実施	③子どもに応じた問題量を用意し、取組の目安を子どもに示して取り組ませる。子どもの実態に即した支援を行い、達成感を味わわせるようにする 【チャレンジタイムの指導に入った全教職員が実践する】	86%	◇アンケート結果より 児童の「できた」の意識78% 教職員の「できた」の意識94% *「少しできていない」「できていない」と回答した子どもは11名(2学期末より5名増)			
			学級担任と連携して、子どもの家庭学習習慣の確立に取り組む	④懇談と通信をとおして担任と共通理解した、子どもへの具体的な学習支援の方策を実行する 【特に通信を活用して、子どものノートの紹介や学習の様子・進捗等を伝えていく】	82%	◇アンケート結果より 保護者の「できた」の意識82% (教職員の「できた」78%) *保護者への定期的な働きかけを継続していく			
			学校が地域人材の活用を図る学習活動に、人材として積極的に参加する	⑤各学年が学期に1回以上企画する地域人材活用の学習活動に、積極的に参加する 《 参加した学習活動及び子どもたちに向けた感想を書く 》	60%	各学年、次のような人材活用の学習活動を実施 ・昔の遊び体験(1, 2年) → 9名 ・デザイン画(3年) → 1名 ・昔の道具体験(3年) → 2名 ・読み聞かせ(1～6年) → 8名 *感想を書いていただけの方は → 60%			
＜徳＞ 自分に自信・友だちに思いやりをもつ子どもの育成	①由布市Q-U調査において、非承認群を15%以下にする (満足群を70%以上にする) ②活動後に実施する児童アンケートで、活動前に示した「具体的なめあて」をもとに、全員の児童が「達成した」と回答する	学校 お互いのよいところを認め合う場の設定	毎月1回の生活研の実施と、その実態把握からとらえた子どもたちの特性をふまえた全教職員による指導の推進 (子どもたちに自己肯定感・自己存在感を味わわせることを念頭に)	①毎月生活研を実施し、子どもたちの実態と指導の方向性を共通理解し、全教職員で指導を行う 【学級担任は、行事の一場面や注目場面等を想起させて、振り返りや意欲付け等を実践】 【担任以外は、各自の持ち分の場面で気づいたこと等を担任へ必ず連絡する】	77%	◇アンケート結果より 生活研で子どもとらえを伝える → 84% 生活研をうけて、担任が月一回程度のSST等を実践 → 63% 共通理解したことを指導に生かす → 85% *3学期の忙しさの中、SST等実施の余裕がなかった ◇縄跳び大会、6年生を送る会、児童集会活動で、事前のめあて確認と事後の振り返りが100%実施できた	◇Q-U調査(2回目)の結果より ○非承認群 → 19% ○満足群 → 49% * 両方ともに1回目から微増している ◇行事、活動後の振り返りアンケート ・縄跳び大会 → 98% ・6年生を送る会 → 99% ・児童集会活動 → 100% → 総合で 98% (参考) ◇子どもアンケートより ・学校は楽しいと思う → 80% (低→94%、中→85%、高→63%) ◇保護者アンケートより ・子どもは学校が楽しいと感じていると思う → 79% (低→87%、中→79%、高→73%) * 高学年になると、活動推進の立場での難しさを感じ、今までの自分の姿をあらためて素直に見つめたことが反映していると思われる	【指標の妥当性】 取組指標については、今年度中の検証を踏まえて改善した「留意点」が、具体的取組の明確化と実施率の向上につながっており、できれば次年度もこの内容を継続していくべきだと考えられる 達成指標の「学校が楽しい」については、今年度途中から、行事や活動が終わった段階で、「めあてを達成して楽しかったかどうか」を把握する方向性にしたことで、リアルタイムでの児童の実態把握につながっており、できれば次年度もこの内容を継続していくべきだと考えられる 【取組状況から】 ①は次年度も引き続き推進 ②は次年度もさらに工夫を重ねて引き続き推進 ③は別紙にある工夫を加えて次年度も引き続き推進 ④は「生活リズムががんばり表」の取組を含めて引き続き推進 ⑤はさらに推進 【達成状況から】 次年度も引き続き、子どもの自尊感情(自己存在感、自己肯定感、他者理解)を高めていくことに焦点を当てた取り組みを積み重ねていくことが重要になる 子どもたちの生活集荷の確立、ゲーム機、タブレット、スマホ等に関する家庭での約束の実行に焦点を当てた取組が、次年度は重要になる	別紙 《3学期の取組の検証と次年度に向けて》 参照
			集団生活のきまりを大切に、落ち着いた生活の促進を図る	②学級担任は、各学級の一日のどこかの場面で、「よいところ見つけ」を実践する 【各クラスでの取組のマンネリ化を防ぐために、《どんな視点で見つけるのか》《見つけ方の視点の違い》等を教師が意図的に見せながら指導していく】	90%	◇アンケート結果より ・一日のどこかの場面で「よいところ見つけ」を実践する → 90% *各クラスでマンネリ化を防ぐための工夫が実践できた			
			基本的な生活習慣の定着を図る	③生活目標をもとにして児童会で「なかよしめあて」「あいさつめあて」を立てさせ、学級担任は、各学級の実態に合わせてその具体化に取り組む 【各学級の具体的なめあてを全校に向けて提示し、担任以外は持ち分の指導に生かす、毎月全校でふりかえりの場をもつ】 【各学級の具体的なめあてには、できるだけ、友だちの頑張りの認め・言葉遣いを入れる】	84%	◇アンケート結果より 具体的めあてを提示し指導に生かす(担任) → 90% 持ち分の指導に生かす(担任以外) → 78% *「友だちの頑張りを認める」「相手の気持ちを考えた言動をする」について、毎月のめあてに入れて取り組ませ、振り返りをさせることができた *教職員各自の持ち分での指導が定着してきた			
			学校が企画する地域参加の教育活動に積極的に参加する	⑤参加した教育活動について、必ず子どもたちへの感想を書く	60%	各学年、次のような人材活用の学習活動を実施 ・昔の遊び体験(1, 2年) → 9名 ・デザイン画(3年) → 1名 ・昔の道具体験(3年) → 2名 ・読み聞かせ(1～6年) → 8名 *感想を書いていただけの方は → 60%			